

埼玉県・医療法人社団協友会 埼玉回生病院

〒340-0825 埼玉県八潮市大原 455
<https://www.saitamakaisei.com>

- 院長：岳 眞一郎
- 設立：1980年
- 病床数：311床
- 診療科：内科、老年内科、循環器内科、漢方内科、呼吸器内科、アレルギー科、神経内科、皮膚科、泌尿器科、リハビリテーション科、歯科、歯科口腔外科、矯正歯科



地域の信頼厚い高齢者医療を推進する病院

漢方内科を加えた高齢者医療

「花と緑、そして笑顔があふれる病院」――。

これが埼玉県八潮市にある医療法人社団協友会 埼玉回生病院（岳 眞一郎院長・311床＝療養病棟 277床、地域包括ケア病棟 34床）のキャッチフレーズだ。

同院は、都心の秋葉原駅から徒歩7分の場所にあり、また首都高速道路6号三郷線の八潮ICまたは八潮南ICからも3分という抜群のロケーションで、これなら広域からのアクセスは極めて便利で、広い医療圏が想像できる。

同院を訪れたのが6月初め。敷地内の随所に花が咲き、建物の周囲には木々の緑がその濃さを増している時季だった。敷地内の一番奥にあって、開設時からある2階建てのD棟に囲まれたリハビリ庭園は、よく手入れがされていて、とりわけキャッチフレーズの趣を醸し出す「花と緑」の場所である。

昭和55年（1980）に高齢者専門病院として開設以来、地域高齢者医療の中心的役割を担ってきた。その間、平成20年（2008）4月には、埼玉県、東京都、千葉県、神奈川県、茨城県、山梨県、群馬県の1都

6県で28病院と21介護老人保健施設などを開設する上尾中央医科グループ（以下、AMG）の病院の一つとして組織変更し、それまでの病院機能に加えさらなる機能強化を進めてきた。地域住民の期待に応える形で一般外来診療を始めたのもAMGに加わった同年11月からだ。平成24年（2012）7月には耐震を完備した5階建ての新棟（A棟）が竣工するに至って、規模の拡大も図られ、同年8月からは歯科診療も開始した。

標榜する診療科は内科、老年内科、循環器内科、漢方内科、呼吸器内科、アレルギー科、神経内科、皮膚科、泌尿器科、リハビリテーション科、歯科、歯科口腔外科、矯正歯科で、それぞれに高齢者対応に直結する診療科としての専門性の高さがみて取れる。一方で複数の疾患を総合的に診察する必要が少なくない高齢者医療をカバーするにふさわしい専門科を揃えているといえる。

特にアレルギー疾患・自己免疫疾患・生活習慣病・婦人科疾患などを漢方薬で身体のバランスを整えて体質を改善し治療力を高めることによって諸症状を改善することを目指す漢方内科と、むし歯や歯周病治療、入れ歯の作製などを行う一般歯科と抜歯などの外科処置を行う口腔外科を併設する歯科領域を持

っていることも特徴といえる。今や同院が“高齢者医療”を標榜する上で欠かせない存在となっている。ちなみに岳院長は日本東洋医学会漢方専門医だ。

また、渡航外来による海外渡航診察を行っているのも特徴の一つで、ここでは海外渡航者への情報提供、健康相談、予防接種を行う。現在は新型コロナウイルス感染拡大の影響で需要はほとんどない状況にあるが、コロナ禍以前もそうだったように、本来の社会に戻れば再び需要が膨らむ領域である。

1日平均の入院患者数は283人、入院延べ患者数は8,652人、病床稼働率は90.9%、1日平均の外来患者数は105人、外来延べ患者数は2,564人となっている（いずれの数値も令和2年9月実績）。

「回生」の名を体現できる病院

今回、同院を案内してくれたのは、秋葉陽子総務課長だ。

車寄せから、いわば本館ともいえるA棟の玄関に入ると風除けスペースだが、コロナ禍の最中ということもあって、まずはここで職員立ち会いの下に、厳重に検温、手指の消毒などを

行つての入館となる。

穏やかな雰囲気を醸し出すエントランスロビーを取り囲むように、右側に外来、入院受付、会計コーナーがあり、正面奥には薬局がある。受付コーナーを進むと、診察室が並んでいて、外来部門はここに集約されている。さらに検査室、処置室、レントゲン室、CT室、歯科診療室、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、地域連携課などはA棟1階とそれに連なるB棟1階に配置されている。

病棟は、A棟2階から5階とC、D棟で、症状は安定しているが長期の療養を必要とする慢性疾患の高齢者患者のための療養病棟と、在宅継続または在宅復帰に向けてリハビリがしたい患者をサポートする地域包括ケア病棟がある。

療養病棟（277床）は、主に急性期医療を行う病院での治療が一段落し、病状は安定しているが、自宅で療養することが難しく、病院レベルでの長期の療養が必要とされる患者を対象とし、医療およびリハビリなどの療養を目的としている。病室面積や廊下幅が広く、機能訓練室、浴室、デイフロア（食堂、談話室）がある。ここは介護職員の配置が多いのが特徴だ。

一方、平成27年（2015）1月に開設した地域包括ケア病棟（34床）は、在宅療養生活を少



リハビリ庭園 「花と緑、そして笑顔があふれる病院」のキャッチフレーズを象徴する場所の一つ。ゆっくり散策したり、木陰で休んだり、開設時から来院者を和ませ続けている。



外来受付 感染対策も万全に。



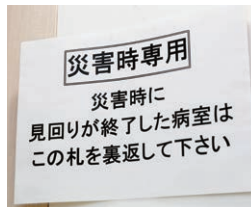
ワクチン接種プレハブ棟 感冒症状などの予約外来のトリアージ診療として設置。現在は地域住民の予防接種スペースとしても使用している。



スタッフステーション 見通しが良く、各病室との行き来もスムーズ

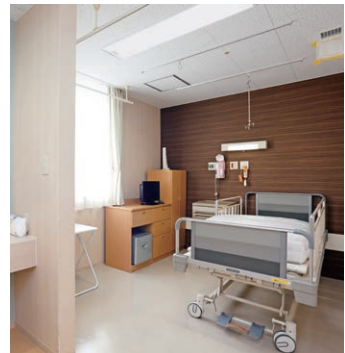


感染隔離病床 新型コロナウイルス感染症が疑われる患者のインソレーション病室を病棟奥に設置した。



一般病棟 全ての病室の前に「災害時専用」の紙を貼付している。いざ災害が起こった際に、見回りができたかをすぐに確認できるようにしている。

個室 同じタイプの部屋が隣接する。



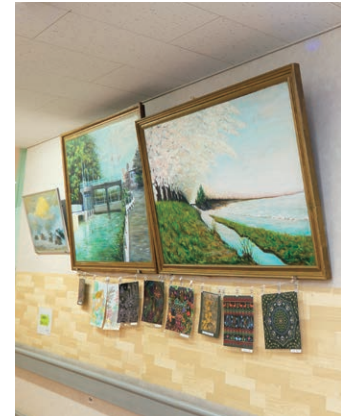
CT室



薬局



通所リハビリテーション室 それぞれの患者に適した作業プログラムを作成。皆の真剣な表情が印象的だ。



患者による絵画作品 大きく緻密な作品群に目を見張る。



「回生通所農園」 キュウリなど四季折々で作物を育てて収穫する。



リハビリテーション室 開放的で、設備が整っており、自然とやる気が出る。



歯科診療室 歯科医師と歯科衛生士が常駐している。



浴室



散髪風景 理容師が定期的に来院。サッパリすると好評



厨房 職員食堂では1食250円で栄養バランスの取れたランチが食べられる。



保育所 仕事の合間に広いガラス窓の向こうから子どもの様子が見られる。



送迎車 通所リハビリテーションの患者を送迎

 **生き抜くモチベーションを醸成**

少しでも長く送りたい在宅生活者と、急性期病院退院者の在宅復帰を短期入院（60日以内）によりサポートすることを目的としている。

自宅や在宅系施設で療養生活をしている患者のうち、在宅療養生活継続のためのリハビリや栄養管理などをしたい患者、重度の医療管理が必要となった患者が対象だ。また、急性期病院での治療が終了した在宅復帰希望者で、すぐに自宅や在宅系施設へ移行するには環境整備などに不安があったり、在宅復帰へ向けてもう少しリハビリを続けたい患者も対象としている。

全体がゆったりとしていることも特徴だが、特にA棟は、色調と間接照明などの工夫によって、療養環境として申し分のない明るさと穏やかさが醸し出されている。高齢者の医療は時間がかかる場合が多いので、「わが家のようにリラックスできる場を提供したい」とする考えがこうしたハード面においても実現されているといえる。

特に注目したいのは、通所リハビリテーション・リハビリテーション室およびリハビリ庭園の機能と空気感だ。いずれも患者それぞれのレベルに対応できるような様々な工夫がされたりリハビリ設備となっている。作業療法によって出来上がった患者の作品もにぎやかに飾られている。壁に展示されている絵画の中には大きな号数の相当なレベルの作品もあって目を引く。

庭園の一角に家庭菜園ほどの「回生通所農園」と表示板がある畑があって足を止めていると、秋葉課長が「患者さんの心のリハビリに、成長する野菜を見ることはすごくいいことだと思います」と話しかけてくれた。

パワーリハビリ設備で汗を流す患者さんに聞いた。「きつくはないですか？」

愚問であった。患者さん曰く「これに取り組んでいると病氣療養していることを忘れるんですわ」と。確かにリハビリテーション室全体にそんな空気が流れているのを実感した。こういうところが同院の同院たる所以であり、まさに「回生」の名を体現できる病院なのだ。

組織変更した平成20年（2008）に院長に就任した岳院長は、「地元八潮市はもとより関東一円の皆さんに安心してやって来られるような高齢者医療の場を提供したい」と思いを語るが、すでにこうした広いエリアからの患者を受け入れていて、その実績は“折り紙付き”だ。

これはもちろんロケーションの良さも要因の一つには違いないが、何よりも基本方針に掲げる「地域ニーズに即した医療を提供します」ということを開設以来、40年以上にわたる病院運営において、ぶれない方針の下に、ハード、ソフト両面で丁寧な取り組みを実直に実践してきたからにはほかならない。敷地内の新旧の施設が、病院運営において古さと新しさが良い意味で“同居”しているような気がしたのも、そうしたことが根底にあってのことだろう。

ここでいう地域ニーズとは、外来診療・入院療養・在宅生活支援に対するものだが、こうした局面で、患者やその家族からの医療に関する質問、退院後の健康管理、福祉施設、介護保険に関する相談など様々な場面でサポートし、そうすることで地域の高齢者のキーステーションとして機能するのが同院の本領だ。その役割を果たしていくためには、「一番大切なことは、医療を提供する側と受ける側との相互の理解と信頼です」と岳院長は語る。

だが、これを醸成していくにはそれ相応の努力と時間がかかる。病院機能のレベルアップ、スタッフのスキルアップ、地域医療機関や施設との良質な連携の構築、それに院内の多職種におけるチームワークの良さ……などなど。

同院には、様々な疾患を抱える高齢患者だけではなく、終末期の患者もいる。しかし、この医療現場には、受け入れるすべての高齢患者に、病氣そのものの治療による改善や重症化予防に努めるだけでなく、患者の「生き抜くモチベーション」を生み出すような空気感がある。